

佐土原キリスト教会 2023年11月12日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書6章9節b

説教題：神が御名を惜しまれるから

先日「なぜ『旧約聖書』には戦いの記述が多いのか」という大学教授を引退された先生の講義をインターネットで聞きました。詳しい内容をご紹介します時間はありませんが、簡単に言うと次のようなことです。『旧約』の時代、戦いの時代を生きた『旧約』の聖書記者達が神様のことを語ろうとすると、どうしても、戦いの中で助け、守り、勝利をさせて下さった神様のことを書くことになる—(もちろん靈感を受けてですが)。神もそれを許された、その意味で『旧約』は、神様の全体像を書いたものではない。だからこそ、イエス様が愛の神様を人間に教えるために地に来られ、十字架の道を歩いて下さった。そういう話でした。まだ講義は続くようですが、イエス様は、神様の姿を明らかにするために命を懸けられたというのです。それは、今朝の「聖書」の内容と重なる部分があるように思ったことでした。

さて「主の祈り」、今朝は2回目、「第1の祈り」、「御名があがめられますように」(マタイ6:9)という祈りの言葉について学びます。この言葉は、イエスが「主の祈り」を教えて下さった理由を教えます。私達は、祈る時、まず「神の御名が崇められますように」というような祈りをするでしょうか。まず自分の願いを祈るのではないのでしょうか。その意味でも、「主の祈り」を通して「神が何を願っておられるのか」、御心に近づく必要があります。「御名があがめられますように」ですが、私達が覚えている「祈り」の言葉は少し違います。それは「御名をあがめさせたまえ—(御名をあがめさせて下さい)」です。「御名があがめられますように」と「御名をあがめさせてください」とではニュアンスが違います。原文のギリシャ語は「あなたの御名があがめられますように」、厳密に言うと「あなたの御名が聖なるものとされますように—(聖なるものとして取り扱われますように)」という言葉です。「あなたの御名が聖なるものとされますように」とは、どのような意味なのでしょう。なぜそれが「あなたの御名をあがめさせて下さい」という言葉に訳されたのでしょうか。実はこの2つの訳語が、この「祈り」の意味を語ってくれるのです。

1：「御名があがめられますように」

第1番目に「あなたの御名があがめられますように—(御名が聖なるものとされますように)」とはどういうことでしょうか、「あなたの御名があがめられますように」と祈る時、私達は何を祈っているのでしょうか。

まず「御名があがめられますように(御名が聖とされますように)」と祈らなければならないということは、そこに「神の御名が聖なるものとされていない」という状況があるということです。つまり「神の御名が汚されている」ということです。「エゼキエル書」にこうあります。「イスラエルの家が、自分の土地に住んでいたとき、彼らはその行ないとわざとによって、その地を汚した…それでわたしは…彼らを国々に追い散らし、彼らの行ないとわざとに応じて彼らをさばいた。彼らは、その行く先の国々に行っても、わたしの聖なる名を汚した…わたしは、イスラエルの家とその行った諸国の民の間で汚したわたしの聖なる名を惜しんだ」(エゼキエル36:16~21)。何を言っているかということ「神を信じない人々が神をバカにして、神の御名を汚した」というのではない、「神の「御名」を掲げていた神の民イスラエル人(ユダヤ人)がその御名を汚した」というのです。「御名」というのは、名前のことではありません。「詩篇」に「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう」(詩編20:7)とあります。これは「困難の時、私達は神がどんな方であるかを思い出して、神によって勝利しよう」という意味です。「聖書」で「御名」とは、それは「神がどういう方か」ということを表現する言葉です。ということは「神の民が『神がどういう方であるか』、それを諸国の人々に表すことに失敗している」ということが言われているのです。しかしそれは「旧約」時代だけの話ではありません。使徒パウロはローマのクリスチャン達に向かって言いました。

「…『神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている』と書いてある…」(ロー

マ2:24)。「あなた方も同じだ、クリスチャンを通して神の御名が汚されている」と言うのです。私達はどうか。私達は、神が聖なる方、素晴らしい方であることを表すのに失敗していないでしょうか。私は、新卒で学生気分のままその小学校で仕事を始めて、色々な失敗をしたのです。そして神の「御名」を汚したように思います。今でもこの辺りは顔を上げて歩けない思いなのです。皆さんはいかがでしょう。「私は神の素晴らしさを表している」と思われるでしょうか。

しかしポイントは、「あなたの御名が聖なるものとされますように」と祈る、では誰が神の「御名」を聖なるものとするのかということです。「エゼキエル書」の続きです。「わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう…わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く」(エゼキエル 36:16~24)。神の民によって汚された神の「御名」を、民が聖なるものとするのではなくて、神ご自身が聖なるものとするを仰る。どうやってそれをされるのか。捕らわれて国々に散らされた人々をもう一度集め、国を再興するという業を行う。つまり彼らの罪を赦し、立ち上がらせ、新しくやり直しをさせる、そのような恵みの中に神の民を引き込むことによって、他の人々がその様子を見て「神は凄い」と神の名を崇める、そういう形で「ご自身でご自身を『聖なるもの』とする」と言われる。この御言葉は、直接的にはバビロン捕囚からの帰還を預言するのですが、同時にイエス様による救いを預言するのです。

神の名を汚さざるを得ない、そういう生き方しか出来ない人々が—(私達が)、イエスの十字架の業によって罪赦され、立ち上がらせてもらって、新しく生き始める。その人々には、神様が父として働いて下さる。その人達を見て、人々が「神は凄い」と言うと言われるのです。私も神に赦され、やり直しをさせてもらいました。私を見て「神は凄い」という人はいませんが、でも「神に一切を赦された—(赦されている)」、その思いがあるからここに立てるのです。

カナダで出会ったご高齢の兄弟は、かつては、商売がなかなか上手く行かなくて、いつも金策に追われていたそうです。夜はビールを飲んで憂さを晴らしていた。でも心配で眠れない。ある時、本屋で「眠られぬ夜のために」という本が目に残りました。その本に「一遍キリスト教を試してみなさい」とあって、彼は近くの教会に行ったのです。その時に「何か」が心に入って来たそうです。それから教会に行き始めました。やがて煙草が欲しくなくなり、あれだけ酒に逃げていたのに、ビールが欲しくなくなったそうです。「今日はビールは要らない」と言ったら奥さんがビックリしたのです。「一体何がこの人を変えているんやろ」と、奥さんも教会に行き始め、イエス様に捕らえられたのです。この兄弟が良く言っておられました。「先生、神は凄いな」。私も心から言いたいです。「神は凄いですね」。いずれにしても、初めから終わりまで神がして下さることです。私達はイエス様を知ることにおいても、罪赦されて恵みの中に生きるようになることにおいても、何もしていない。ただ恵みに預かるのです。神に働いて頂くのです。そして、神様が神様として、私達の父として豊かに働いて下さる時、私達も恵まれるのです。

そこで「御名があがめられますように」と祈る時、何を祈っているのか。それは、「神がご自身の御名を聖なるものとされる、奇しい御業を為さる、その御業がますます豊かに行われ、1人でも多くの人々が、神の御業に触れて、十字架を仰ぎ見て、神様を崇めることが出来ますように」と祈るのです。誤解を恐れずに言えば、神様が「私の御名の聖なるために祈って欲しい」と私達に頼んでおられるのです。これは祈らなければならない。しかしそれだけではなく、ある先生の本にこうありました。「この本では、ひとりのズッコケ牧師の姿をご披露することにより…キリストに取り扱われ、叱られ、導かれ、守られ、変えられる様子を紹介しよう。そして、このズッコケ牧師の背後におられる大いなる陶器師に、読者の目が向くように祈りつつ書こう」(横山幹雄)—この祈りです。「こんな私が、神の御手の中で生かされているのを見て、人々が神様の素晴らしさを認めることが出来るように」、つまり「この私が、神の素晴らしさが現れるた

めに役立ちますように」という祈りでもあるのです。

2:「御名をあがめさせたまえ」

第2番目に「御名をあがめさせたまえ—(私にあなたの御名をあがめさせてください)」です。神の「御名」を聖なるものとされるのは、神ご自身です。私達は「神の業が豊かに行われますように。私も神の素晴らしさを表す器として役立ちますように」と祈るのですが…。「イエス様の十字架によって、神はご自身が聖であることを表された」と申し上げましたが、初めに申し上げたように、そのために—(神の栄光が輝き出るために)—イエスはご自身を捧げられました。「ヨハネ福音書12章」では、ご自身を十字架に差し出す決断をするために信仰の格闘をされた後、「父よ、み名があがめられますように」(ヨハネ12:28)と、「そのために十字架の道を歩みます」と祈られるのです。その意味では「神様の素晴らしさが現れるために、私も役に立ちますように」というのは、より積極的に言えば、私達が神様の「御名」が聖なるものとなるために生きる、そのような積極的な部分もあるのだと思います。今申し上げたその生き方の部分を理解して、私達の先達は「御名をあがめさせたまえ—(私にあなたの御名をあがめさせてください)」、「私が、あなたの御名が聖なるものとされるために生きることが出来るようにさせて下さい」と言い換えて祈ったのです。では、どうやって私達が、神の「御名」が聖なるものとされるために生きることが出来るのか、私は2つのことを教えられます。

1)「神を信頼する」こと。

それは、何よりも、まず神様を信頼することです。例えば、イエス様が「主の祈り」を教えて下さらなければ、私達の祈りは、どういうものでしょうか。私達が熱心に祈るのは、自分が困ったから、自分が苦しいから、問題の解決のために祈らずにおれないから、そういう祈りが多いと思うのです。ある人は、極端に次のように表現しました。「私達の祈りに現れる信仰の姿勢は、どうしても自分が上手く行くように、自分が成功するように、自分が榮譽を受けるように、生活の無事、家族の無事、仕事の成功…そういう性格を持っているのではないのでしょうか」(小島誠志)。それはそれでとても大事だと思います。しかし、祈っても何も変わらないように思える時もあります。物事が失敗することがあるかも知れません。願ったことが願った通りにならないこともあるでしょう。問題は、その時にどう思うか、どうするか、ということです。

しかし、神を信頼するとは、私達に見えるところの奥に隠されている、神の御思い、神の知恵を信じることではないでしょうか。何も変わらないように見える、願ったことが願った通りにならない、しかしそこで「神の御旨は私の願い求めるところより高い、深い」と信じるのです。失敗したからお終い、つまりいたから絶望、それは人間的な考えです。人間の知恵や考えが終わったと思うところで、しかし神の御旨は終わっていないのです。私達が否定的にしか見ることが出来ないところに、神の恩寵が隠されていることがあるのです。それを信じるのです。その隠された神の御旨に目を向けなければ、行き詰まったその場所が終点になってしまいます。しかし神を信頼するとは、そこで神の摂理が終わったとは考えないのです。いやその先に希望を見るのです。私は鬱で入院した時、「もう何もかも終わりだ」と思いました。神様も遠く、遠く、自分とは関係のない存在のように感じました。しかし、終わりではなかったのです。ある意味で、そこからが第2ステージの始まりだったのです。

「AD」という「使徒行伝」を描くドラマは、イエスが架かられた十字架が取り壊されるところから始まります。暗い場面です。しかし、その場面に「始まり」という字幕が出るのです。弟子達は「もう終わった」と思ったのです。しかし神の摂理の中でそこは終わりではなかった、始まりだった、そこから教会も始まって行くのです。同じように私達も「つまりいたことも、行き詰ったことも、すべては『良かった』のだと分かる日がやがて必ず来る」、そのことを信じるのです。良く見えることも見えないことも「神は良きことをして下さるに違いない」と委ねるのです。ある方が言うておられます。「信仰を持つということは、どんな状況でも、自分に思わしくない状況に思える時にも、必ず背後で神様が事を行ってくださっている、と考え

られることでしょう。それが何であれ、今の自分にとって最善のことを神はしてくださっている、と思えることが信仰でしょうし、今までを振り返ってみて、確かにそうだったと思えることは感謝すべきことです(宮原寿夫)。それが信頼するということではないでしょうか。その信頼を生きようとする時、私達も神の「御名」を聖なるものとする、そのような生き方をさせて頂くことが出来るのではないのでしょうか。

2) 「御言葉に従う」こと

この話は何度もしているのですが、「神の御名が崇められる」ということを思う時、どうしても思い出す話です。

南米のある村を襲撃した軍隊の隊長が、「クリスチャンは敵を愛するのだ」と言った1人クリスチャンを通してキリスト教に興味を持ち、村の礼拝に出て来ます。村の礼拝では、新しい人が来ると全員がその人を抱擁して歓迎することになっていました。司式者が「この隊長達は村の人々にとって、自分の夫や息子、兄弟を捕らえて連れて行った張本人だ。彼らを歓迎することはとても出来ないだろう」、そう思って歓迎のプログラムをとばそうとした時、村人の方からそれを始めたのです。最初に近づいた人が言いました。「兄弟、あなたが私達の村にしたことは間違っていると思います。けれどもここは神の家です。神はあなたを愛しています。だからあなたを歓迎します。良くいらっしやいました」。村の人々は、夫を連れ去られた人も、兄弟を連れ去られた人も、皆が次々と歓迎の言葉を述べました。最後の人が歓迎の挨拶を終えた時、隊長が話をさせて欲しいと言いました。「村を襲撃してその村にやって来たのに、兄弟として歓迎されるとは考えもしなかった。今朝、この目で見たことはほとんど信じられないくらいです…教会の礼拝に来たのはこれが初めてです。今まで神がいる等と思ったことは一度もなかったけれど、私は今、不思議な感動を味わっています。生きている限り、神の存在を疑うことはもう決してないと思う…ここにいる人達は、皆、神を知っているのですか。もしそうなら、どんな時でも神にすがりついて下さい。神を知るということは、この世で一番素晴らしいことに違いないと思う…私もいつかは『神を知っている』と言えるようになりたい」。

神を信じるとは思えないような人が、村人の信仰の業で神の「御名」を崇めたのです。もちろん、私達の現実とは、かけ離れた話です。でも本質は同じだと思います。私達もそれぞれ置かれている場で、御言葉に従うことによって、神の素晴らしさを表すことが、「御名」を聖とさせて頂くことが出来るのではないのでしょうか、いや、神がそう用いて下さるのではないのでしょうか。

最後に

ある神学者は言いました。「祈らないということは、ただ信仰生活のひとつの奨めを守らないということに留まらない。神を信用していないという心の表れである」。私達は、何よりも、祈りたいと思います。